

高島鞆之助と大阪偕行社附属小学校*

経済学部経済学科教授 三 崎 一 明

1966(昭和41)年、追手門学院大学は北摂茨木の地に設立された。大学設立は追手門学院の創立80周年の記念事業の一つである。追手門学院は、1888(明治21)年、大阪の地に設立された大阪偕行社附属小学校を母体とする。大阪偕行社附属小学校の開設者は陸軍中将子爵、高島鞆之助である。現役の軍人でありながら、1888(明治21)年という時期に小学校開設という崇高な事業をおもい、それを貫徹した高島鞆之助という人物についてはすでにおおくのことが語られている。この稿の目的は、ひとつには高島が偕行社附属小学校を開設するにいたった高島の背景を考察することにある。ふたつにはさきの文献で触れられていない高島にかかわる事跡の紹介、詳しく触れられていない部分を補足することである。要するに、本稿の目的は、高島の本格的な肖像画を描くことではなく、高島のスケッチを大阪偕行社附属小学校にかかわる周辺の景観とともに数枚描くことにある。

1

高島鞆之助は、1844(弘化元)年11月9日、鹿児島藩士高島喜兵衛・貞子の第4子、3男¹として鹿児島城下高麗町に生まれ、1916(大正5)年1月11日、満71歳2ヶ月で京都伏見の高島友武宅でなくなる。愛読書は頼山陽『日本外史』、この本は幕末維新期のベストセラーである²。身長は5尺6寸(170cm)、体重22貫(82.5kg)の偉丈夫であった³。性格は、「大薩摩の匂いの残つとつた人ぢや。(略)薩摩人特有の鄙吝な所はちつとも無かつたネ。何時か金山を手に入れて(略)評判ぢやた時に会つたら、大得意で、これからはお互いに小遣銭には困らんよなど、言ひよ

* この稿を書くにあたって、追手門学院大学附属図書館の参考・相互利用担当者に大変お世話になったことを感謝します。

1 天野(1968) p.4.

2 樺山資英伝刊行会編(1942). 頼(1829)所収の藤正英「解説」に、幕末から明治にかけての歴史書のベストセラーとある。宮内庁編(1969)2巻, p.475, 明治天皇に、元田永孚は論語にくわえて、『日本外史』を御進講したとある。

3 樺山資英伝刊行会編(1942) p.263, p.266.

つたが⁴。また、「もともと親分肌の人で大ザッパなところがあった、(略)なかなか頑固な人で、言い出したら一步も引かぬという風なので、薩摩の先輩もやゝ敬遠の形であった⁵。

高島軻之助の妻、春子は1854(安政元)年5月1日、鹿児島藩士、山口喜三右衛門の5女として生まれ、兄は山口栄之丞、春子は1904(明治37)年10月になくなっている。高島軻之助の妹(高島喜兵衛2女)登女子⁶は、鹿児島城下高麗町出身の野津道貫の妻である。

高島の子供時代の話である⁷。

「高島將軍厳父は篤実なる好人物で家政窮乏を來たし日々の糧さえ事欠き、一家は粥食で暮らした程貧であった。將軍は幼にして穎悟、文武に秀でた親孝行者、炊事の水汲みやら米搗きを終えて、毎日御殿に仕えた。或る時は刀のサゲを買うことにも不如意、令姉が夜業の賃で買求め与えたという逸話がある」。

軻之助の長女多嘉の夫、陸軍中将高島友武は、吉井友實の3男であり、友武の姉澤子は大山巖の妻である。また、友武の兄吉井幸藏の長男は歌人の吉井勇である。のちに勇の弟(吉井幸藏3男)の友春が、高島友武・多嘉夫妻の養子となり、多嘉の妹愛子の娘、初子と結婚する。

吉井友實は、1828(文政11)年2月26日に鹿児島城下高麗町、高島と同じ方限(ほうぎり)⁸に生まれ、1891(明治24年)4月22日になくなる。軻之助が侍従となったときの宮内大丞である。明治15年から同17年まで日本鉄道株式会社社長を務め、1884(明治17)年、伯爵となる。

軻之助の2女球磨子⁹は樺山資英と結婚する。樺山資英の父は栃木、佐賀、岐阜、宮崎の知事を歴任した樺山資雄である。樺山資英の母直子は大久保利通のいとこである¹⁰。資英は、台湾総督府参事官、第二次松方内閣首相秘書、樺山資紀文相秘書官、第二次山本権兵衛内閣書記官長を歴任し、のち日露漁業相談役、国際電話株式会社社長となる¹¹。

軻之助の3女愛子は、徳永重康と結婚する。徳永は東京帝国大学理科大学動物学科に入学、地

4 頭山(1927) p.39. 金山は、鹿児島の牛尾金山のことである。失敗して、30万円の借金を残す。樺山(1988) p.121. やまと新聞社、保険事業等にも関係するがすべて失敗する。樺山資英伝刊行会編(1942) p.9. 明治43年の総理大臣の年俸は12000円、大正元年の巡査の初任給(月給)15円である。巡査の年俸は、初月給で180円、30万円はその1667倍である。週刊朝日編(1987) p.565, p.570. 三宅(1939) p.264に「金銭に淡泊なるか、利せんとして損せしか、孰れにしても蓄財せざるは西南役後の薩人に珍らしく」とある。ところで島津斉彬も鉾山(金、錫、石炭)開発に熱心であった。南日本新聞社編(1967)上, pp.32-33.

5 樺山(1988) pp.121-122.

6 『平成新修旧華族家系大成』下, p.344, では、高島「嘉兵衛」二女と記載されている。登女子の長男、野津鎮之助の妻は末弘直方の4女ひろである。

7 樺山資英伝刊行会編(1942) p.258.

8 60戸くらいを単位とする隣組制度のような協同組織を方限という。樺山(1988) p.6. 西郷隆盛の生誕地、上之園町、高島、大久保利通の生誕地、高麗町、川村純義、辺見十郎太の生誕地、上新田町は隣同士であり、これをとくに三方限という。『三方限名士略伝』。

9 のち、敏子と改名する。天野(1968) p.5.

10 高島軻之助の父喜兵衛と樺山資雄の父とはいとこである。資雄は春山休兵衛の三男で、のちに樺山十郎太の婿養子となる。資雄の母幸子が高島家の出である。また高島喜兵衛の妹も春山家に嫁している。樺山資英伝刊行会編(1942) p.33, p.52, p.258.

11 『平成新修旧華族家系大成』下, p.14, 神田中学校友会(1901) p.423, 『鹿児島県姓氏家系大辞典』p.354, 樺山資英伝刊行会編(1942) pp.670-673.

質学的部門を研究する。理学博士、工学博士の学位をもち、早稲田大学理工学部教授である¹²。

高島頼之助は、1871(明治4)年7月28日、正六位に授せられ、侍従になる¹³。これは岩倉具視、大久保利通、西郷隆盛等による明治4年7月20日の宮中改革の結果である。7月4日、まず民部大丞吉井友實が宮内大丞として任用される。その改革案¹⁴に基づき、これまでの公卿にかえて、7月20日、鹿児島藩士村田新八が宮内大丞に、7月24日以降に鹿児島藩士高島頼之助、熊本藩士米田虎雄¹⁵、高知藩士高谷長祥等が侍従に、佐賀藩士島義武が次侍従に任用される。さらに8月、鹿児島藩士高城重信が次侍従に任用され、侍従、次侍従の事務分担を決め、高島頼之助は御乗馬掛となる。9月、山口藩士河野通信、福井藩士堤正誼を侍従に任用する。9月29日には次侍従は廃止され、次侍従はすべて侍従となる。11月、高知藩士片岡利和、山口藩士陸軍少佐有地品之允を侍従に任用する。8月1日、女官の一新が行われる¹⁶。1872(明治5)年4月30日に侍従番長が置かれ、高島頼之助は、侍従醍醐忠順、堤正誼とともに侍従番長になる¹⁷。同年6月15日、山岡鉄太郎は侍従に任用され、同年10月3日、侍従番長になる¹⁸。

西郷が高島を侍従として選んだのは、高島の軍政治家としての資質が軍人としてよりも優れているとみなしたことが理由と思われる。西郷隆盛と高島の挿話である¹⁹。「麴町の路上に於て一老人に逢うた。隆盛之れに対して甚だ慇懃に挨拶して別れた。高島が彼老人の誰であるかと問うと、芸洲藩の家老辻将曹と答えた。高島歩みながら辻について話しつゝ行くと。斯る事を往来で話しつゝ歩くは甚だ礼を失するものであると、叱りつけた」。

この当時の宮中について、後年高島頼之助はつぎのように語っている。

「自分が始めて天顔に咫尺し奉り、親しく御言葉を賜りしは明治四年であつた。(略)西郷・大久保の兩人(略)は竊かに、明治維新の改革は到底表面のみでは駄目である、永年宮中の奥深く蟠る惰弱の弊風を一掃せねばならぬということに著眼し、吉井友實伯等と謀って破格を以て我々野

12 大塚(1940) p.30. 徳永の地学、古生物学方面の業績について紹介するとともに、金山を経営したこと、牛尾金山の顧問であったことも紹介している。また、中国東北部の調査報告で、昭和12年に朝日文化賞を受けている。『日本人名大事典』p.527。

13 『枢密高等官履歴』p.137, 宮内庁編(1969)第二, p.506。

14 この改革で、宮中に入るものは、諸藩の「剛健質実」のものだけが選ばれている。近世名将言行録刊行会編(1934) p.360. また、森(2001) p.23, は「西郷一人の仕事ではなかったが、(略)まだ一少年におわした明治天皇に、野武士のような荒削りの人々を接近せしめて、宮中に剛健な気分を漲らせたことなど、今日から考えても、愉快に堪えないが、そうした思切った改革は、西郷が在って、始めて成し得たものであ」と書いている。

15 西南戦争のとき、米田の熊本の自宅財産が私学校兵に徴発される。南日本新聞社(1967)中, p.184. 米田の父長岡監物は熊本藩家老で、西郷、大久保が信頼した人物である。佐々木(2004) pp.144-145. 明治25年4月29日、米田侍従は大阪偕行社附属小学校に聖旨を伝える。天野(1968) p.19。

16 ただし従来からの侍従、裏松良光、東園基愛等も任用されている。また新しく任用されたものでも、河野通信は11月に罷免され、12月、島義武は秋田県権令に転出している。宮内庁編(1969)第二, pp.505-507, 渡部(1936) p.50。

17 宮内庁編(1969)第二, p.660. 『枢密高等官履歴』p.137。

18 宮内庁編(1969)第二, p.710, p.765. 明治5年12月2日、山岡は陸軍少輔西郷従道とともに侍従長となる(同, p.802)。

19 近世名将言行録刊行会編(1934)第1巻, p.378. 西南戦争の前に高島が西郷を訪ねたとき、西郷は「肥桶をかついで」いたとある。訪ねたのは、吉野の開墾社であろう(佐々木監修(2004) p.188)。

武士を宮府に奉仕せしめ、一同少壮新進の鋭気を以て、旧来の弊風を打破せんことを奏上申上げた。(略)若武者を選んで、今の所謂侍従として宮中御側近く奉侍せしめらるゝ事に御裁定になったのであった。即ち薩摩からは自分と村田新八²⁰とが、此名誉ある選に当る。

「斯くして聖上の御身边は、所謂血醒き戦場往來の若武者許りで固むる事となり、常に剛健康直の士風を以て忠勤に励んだが、中にも彼の山岡鐵舟の如きは、誠忠無二にして、殊に少年時代より神身を練磨したる人として、躬行以て君に善を勧め奉るのを臣子の本分と心得て直言して憚る所がなかった。(略)此等君側に侍する荒武者共も、殊の外御気に叶わせられたれば、陛下の御勇武は彌が上にも加わる許りであった。

思うに明治天皇の長き御生涯を通じて(略)、其赫々たる御治績を上げさせ給いたる半ばは、かくの如き微賤の者を厭わせ給わず、寛宏明敏、克くこれ等の士を入れさせられ、日々御精神を御練磨遊ばされたる結果と拝察し奉る。(略)

此頃よりの聖上の御精励は非常にして、毎朝早くより表御所に御出御遊され万機を御親裁になって、午後の五時若しくは六時ならでは、御奥へ入御あらせられぬのが常であつた。又時々は夫も御廃めになって、今宵は表御所で遊ぼうとの御諚下り、夜更くまで侍臣を御相手に種々の御物語りに耽らせ給うこともある。斯様の時にイザ御寝と言う事になれば急に御奥より夜の御寝具を運び、吾々侍臣は御廊下に殿居をして一夜を明かすのは決して珍しき事ではなかった」²¹。

明治の創成期に高島は侍従として、明治天皇に仕えることで、国の中樞にいて中樞の人々が何を考え、何を必要とし、どのようにしているのかを見聞きすることで、ものごとを大所高所から考える素養を磨くことができたと思われる。教育という面でみれば、高島は、明治天皇においても若いときにどのような教育を受けたかということは非常に重要であるとはなしている。また、山岡鐵舟の少年時代のことも触れている。明治のこの時期にかぎらず、人材をいかにして育てるのは社会の最大の重要事である。また、『明治天皇紀』をみると、明治天皇も各所の学校を視察され、教育に関しては熱心であったことがうかがわれる。

この時代、宮中での言葉が統一されていたのかどうかはわからない。もちろん宮中で使用される言葉ということでは統一されていたと思われる。この時期、共通語はまだ存在しないので、宮中では京言葉、鹿児島弁、長州弁、土佐言葉、熊本弁、江戸言葉等多く言葉が交叉していたと推測される。そうであればお互い多少の不便を感じたことであろう²²。とくに軍隊において、言葉が統一されていなければ用をなさない。言葉を統一するには学校教育が重要にな

20 さきにふれたように宮内大丞として任用され、同年10月、岩倉具視欧米使節団の一員となる。帰国後、職を辞して西南戦争に薩軍2番大隊長として戦い、42歳で戦死する。

21 高島(1912) pp.32-34. 名村(1997) pp.374-377. 渡辺(1936) pp.53-56.

22 宮中の服装については、西郷隆盛と板垣退助が辞令をもらうために藩の制服を着て、宮中に行ったところ、大木喬之に冠直衣に改めるように注意されている。近世名将言行録刊行会編(1934)第1巻, p.358. 明治天皇も衣服のこととわずらわしいおmoiをしている。森(2001) pp.10-11.

る。均一のものをつくるのは学校の得意とするところである。この時期、高島は言葉の問題には敏感になったと思われる。のちに教導団長を務めることで、さらにその感を深めたと推測される。

1871(明治6)年4月、明治天皇に随行し、習志野にいったときの様子をつぎのように高島は語っている²³。「明治六年彼の西郷隆盛が近衛都督であつた時、陛下始めて大元帥の御職を執らせられ畏れ多くも近衛兵を指揮して習志野まで行軍された(略)。此日近衛都督たる西郷隆盛は、長肥豊大なる偉軀を輕装して、徒歩肅々として之も拔劍のまゝ陛下の御馬の後から扈從し奉つた。(略)扱て習志野が原は(略)草茫々たる大平原であつた。(略)其草原の中に行在所を建てたが、(略)早さやかなる天幕一張りて僅かに露を凌がせ給う位のものであつた。(略)夜に入るに従つて益々甚だしくなる風雨のうちに二夜を過させ給ひし御勇武、御忍耐には老西郷を始めとして将校下士卒に至るまで感泣の涙を止める事が出来なかつたと言う事である」。

まさしくこれは、「我が朝の初め国を建つるや、政体簡易、文武一途、海内を挙げて皆兵にして、天子これが元帥となり、大臣・大連これが偏裨となる。(略)事あれば則ち天子必ず征伐の勞を親らす」²⁴、を具現したものである。

1872(明治5)年、明治天皇は大阪、中国、西国視察のため、品川沖から軍艦に乗って、5月23日、東京を出発する。西郷隆盛、西郷従道、川村純義、徳大寺實則、吉井友實等が随行した西国御巡幸である²⁵。伊勢、大阪、京都、下関、長崎、熊本、鹿児島、丸亀、神戸を、海路で巡航して、7月12日品川に上陸し、帰京する²⁶。高島頼之助も随行している²⁷。これは明治天皇の六大巡幸の最初の巡幸である。前年の明治4年9月には、廃藩置県に反対する不満分子鎮撫のために、西郷従道、吉井友實が鹿児島に派遣されている²⁸。まだまだ各地の状況は不安定と判断し、陸路を避け、海路にしたものと思われる。船旅という限られた空間での明治天皇、西郷隆盛という中枢の人々との身近な交流は3週間におよぶ。宮中での交流よりもはるかに緊密度の高いものであったと想像できる。明治天皇はこのときにも各地で各種の学校を視察している²⁹。西日本各地を直接見たこととあわせて、この経験も高島の日本という国について考える視野を広げると

23 高島(1912) pp.34-37. 明治6年4月は、千葉大和田原と称していたが、同年5月、習志野が原と明治天皇が命名し練兵場となる。『類聚伝記大日本史』pp.366-367.

24 頼(1829) pp.35-36. さらには、国民皆兵(徴兵制)が古来の制度であると述べている。高島は徴兵制を支持したものとおもわれる。明治15年の軍人勅諭では「我國の軍隊は、世々天皇の統率し給ふ所にぞある。(略)古は天皇躬づから軍隊を率い給ふ御制にて、(略)大凡兵権を臣下に委ね給ふことなかりき」となっている。由井・藤原・吉田(1989) pp.172-173.

25 随行者50人、近衛兵一小隊の護衛という陣容である。この随行者のほとんどが薩摩出身者である。南日本新聞社編(1967)中、p.80.

26 宮内庁編(1969)第二、pp.691-731. このとき大阪では、市民が万歳を唱えて歓迎したといわれるが、真偽は明らかでないとの記述がある。万歳を唱えていれば、このときが万歳の最初となる。多木(1988) p.75.

27 『枢密高等官履歴』pp.137-138.

28 宮内庁編(1969)第二、pp.530-531.

29 大阪では、開成所、伝習所、大阪医学校を視察している。同、p.703.

もに、教育の必要性について深く考える契機になったと思われる。

西国巡幸から帰京して、翌月8月3日に「学事奨励に関する被仰出書」³⁰が出される。

「人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以てその生を遂るゆえんのものは他なし身を脩め智を開き才芸を長ずるによるなり而して其身を脩め知を開き才芸を長ずるは、学にあざれば能わず是れ学校の設あるゆえんにして(略)人能く其才のあるところに応じ勉勵して之に従事しかして後初て生を治め産を興し業を昌にするを得べしされは学問は身を立てるの財本ともいべきものして人たるもの誰か学ばずして可ならんや(略)其道を得ざるよりして人其方向を誤り学問は士人以上の事とし農工商及婦女子に至つては之を度外におき学問の何者たるを辨ぜず又士人以上の稀に学ぶものも動もすれば国家の為にす唱へ身を立てるの基たるを知らずして或は詞章記誦の末に趨り空理虚談の途に陥り其論高尚に似たりといえども之を身に行ひ事に施すこと能ざるもの少からず是すなわち沿襲の習弊にして文明普ねからず才芸長ぜずして貧乏破産喪家の徒多きゆえなり是故に人たるものは学ばずんばあるべからず(略)必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す(略)高上の学に至ては其人の財能に任かすといえども幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事」とある。

貧しいのは学問をしないからである、華族、士族だけでなく、女性そして子供も含めすべての人は学校にいかなければならない、しかも国家のためではなくまずは自分自身のために学校にいきなさいということである。そして子供が学校に行かないのは親の責任であるともいつている。さらに、後段の略した部分では、学ぶために必要な費用はみずからが負担せよとはっきり書いてある。まさしく「独立自強」の精神を養えということになる³¹。大事業をおこなう熱気が感じられる文章である。

明治天皇の聖徳涵養に関するこの時期の日課表がある³²。

「毎月一・六の日は休日、二・四・七・九の日は国史纂論の会読にして、(福羽)美静・(元田)永孚奉仕し、三・五・八・十の日は西国立志編の会読にして、その三・八の日には美静・(加藤)弘之、五・十の日には弘之、永孚奉仕す、又三の日には歌御会ありて、歌道御用掛三条西季知及び美静奉仕す、又休日の外、毎日独逸語の御講習あり、尚文部大丞長茂を召して習字を、(略)又美静をして国文法を進講せしめられる」

1873(明治6)年1月7日から明治天皇は『西国立志編』を読んでいる。1874(明治7)年1月7日には、加藤弘之が『西国立志編』を進講し、さらに去年と同じく、『西国立志編』の会読をするとある³³。『西国立志編』は当時のベストセラーであり、かつ高島鞆之助は侍従番長である。維新前後

30 解説教育六法編修委員会編(2005) p.1105.

31 牧野伸顕によると、大久保利通の教育方針は「自修自立」である。佐々木(2004) p.26.

32 宮内庁編(1969)第三, pp.6-7. 1ヶ月間の休日は6日間ある。ただし31日は休日に入れない。

33 同, p.186.

のベストセラーである頼山陽『日本外史』の愛読者である高島は、当然、『西国立志編』³⁴の存在を知っていて、この本を読んでいたと推測される。「学事奨励に関する被仰出書」とともに、この本も高島に影響を与えたと考えられる。

2

1874(明治7)年5月12日、高島鞆之助は陸軍大佐になる。翌5月13日、陸軍省第一局副長、および陸軍省第一局長代理となる。このときの陸軍省第一局長は、鳥尾小弥太である。

1875(明治8)年2月5日、高島は教導団長に任命される。満30歳のときであり、1880(明治13)年4月29日まで5年間この職にある。高島は明治10年3月28日、少将となるので、3年間は少将で教導団長を務めている。高島が教導団長を長く勤め、高島が教育事業を実際に経験したことは、高島に学校の重要性を認知させる役割を果たしたと思われる。

教導団は下士官を養成する学校である。1870(明治3)年4月24日、京都の佛式伝習所を改組して、下士の育成のため大阪兵学寮中の教導隊としたのが最初である。砲兵30名、騎兵20名、建築兵5名であった³⁵。これを佐藤は「明治4年の設立。はじめ大阪兵学寮に属し、上下士官を養成するところなりしが、5年に至り、専ら歩、騎、砲、工、輜重諸兵の下士を教育する所と為り、6年、東京に移り、陸軍省の直轄と為り、8年、軍楽隊を本団に移し、18年、兵営を下総国国府台に新築して、歩兵隊を移し、19年、又砲、騎、工兵隊を之に移す」³⁶、と述べている。

1867(明治4)年12月、陸軍兵学寮の東京移転が決まる。同年12月8日教導隊がまず移転する。団長は陸軍少佐河村洋与である。12月10日に陸軍兵学寮は東京に移転する³⁷。沼津兵学校は、同年5月14日に廃止され、東京の陸軍兵学寮に合併される。資業生の約3分の1、66名、東京の陸軍兵学寮に入り、教導団工兵生徒となり、やがて教導団工兵第一大隊を編成した³⁸。1872(明治5)年6月27日陸軍兵学寮概則を定め、寮中の学校を幼年学校、教導団、士官学校に分け、従来の教導隊が、教導団と呼称される。10月28日の陸軍兵学寮内條例で、「教導団は専ら下士官を教導し、且つその学課を試験する」ものである³⁹、と定められている。1873(明治6)

34 スマイルズの翻訳が発行されるのは、1871(明治4)年である。その巻頭に「天はみずから助くるものを助く」(スマイルズ(1858) p.55)がある。また、「邦国の昌盛は、民各自勉強の力と正直の行いとの総合せるものなり。邦国の衰退は、人民各自懶惰(怠けること)にしておのずから私し、および穢悪の行いの集合せるものなり」(同、p.59)とある。この翻訳本は100万部売れた当時のベストセラーである。

35 松下(1956)上、pp.55-56。明治2年9月に京都兵学所が廃され、大村益次郎の案に基づいて、大阪に兵学寮が設置される。曾我(1988) pp.202-203。

36 佐藤(1903) p.198。

37 松下(1956) p.56。

38 同、p.110。

39 同、p.357。軍楽隊は教導団に属している。山口(1973) p.34。

年8月13日、教導団は兵学寮所属を離れ、陸軍省の直轄となって独立する⁴⁰。

1890(明治23)年3月25日公布の陸軍教導団条例第1条はつぎのように規定している⁴¹。「陸軍教導団は華士族平民中歩兵、騎兵、野戦砲兵、輜重兵科下士に出身志願の者を選別して生徒と為し下士たるに必要な教育を為すを以て目的とす」る。第4条で、団長は歩兵大佐もしくは歩兵中佐一人と規定されている。その後、教導団は1899(明治32)年廃止され、1927(昭和2)年、陸軍教導学校が、仙台・豊橋・熊本に設けられるまで、下士官教育は各隊に委任される。

大阪偕行社附属小学校では、「卒業式には師団長が臨席し、陸軍軍楽隊が演奏するのを」⁴²例としたとある。高島が教導団長となり、軍楽隊⁴³が教導団に移るのが1875(明治8)年である。そして、1888(明治21)年3月には大阪鎮台軍楽隊(のち第4師団軍楽隊)が創設される。第4師団軍楽隊25人は、日清戦争に楽長永井岩井のもと第一臨時軍楽隊として出動している⁴⁴。この当時の軍楽隊は学生に人気があり、日本の洋楽発展におおいに貢献している⁴⁵。大阪偕行社附属小学校がいつから卒業式典を行い、いつから卒業式典に第4師団軍楽隊を取り入れたかはわからないが、大阪偕行社附属小学校と第4師団軍楽隊にはこのような関係があり、高島もまた軍楽隊には関係があったということである。

当時の教導団の様子について教導団の卒業生から、篠田鈺造がつぎのように聞き取っている⁴⁶。

「明治十年四月十五日に、私達は丸の内の教導団へ入団した。(中略)、全国から募られた私達は、四百名の人数でした。歩兵へ編入されて、中隊が極まると、私は第六中隊であった。中隊長殿は、少佐で「平賀国人」と呼ぶ御人でした。教導団の団長は、申すまでもないが、中將高島軀之助閣下でありました。(中略)、生活の待遇は、殊の外よい。朝昼晩三度とも、生玉子二個がついた。私は生玉子を食べないので、日曜日に親類へ三、四十個まとめて、土産にもっていったくらい、朝は味噌汁に香物であるが、昼飯はさしみ、煮肴または牛肉などが、替り番についたものである。御飯はオハチが出してあって、喰べほうだいといった風でしたよ。(略)練兵は午前二時間、午後二時間、学科が午前午後一時間でした。これも楽なもので、百姓をしていた体では、何でもなかった。骨がサゾ折れることだろうと、死身で志願して来た連中には、たわいもない練兵であったが、さすがに学科の一時間は、実に弱ったようでした。右左も分らず、「茶碗手」といえ

40 西郷隆盛は、1873(明治6)年10月に下野する。のち鹿児島で開墾社を設立して、旧教導団生徒150人とともに農耕生活をする。開墾社の別名を教導団学校という。南日本新聞社編(1967) p.139。

41 『官報』p.278。

42 大阪市東区史刊行委員会編(1981) p.334。

43 1869(明治2)年の薩摩藩軍楽伝習隊が最初で、これが明治4年兵部省軍楽隊となる。教導団軍楽隊(のちに戸山学校軍楽隊になる)につづいて第二軍楽隊(のちに近衛師団軍楽隊)が創設される。ついで1888(明治21)年3月、大阪鎮台軍楽隊50名(のちに第4師団軍楽隊)が創設される。1888(明治21)年は、偕行社附属小学校が設立された年である。山口(1973)参照。

44 大阪鎮台軍楽隊は陸軍軍楽隊の3番目として創設される。同、pp.92-93。

45 田辺(1965) pp.168-169。

46 篠田(1996) pp.123-126。教導団軍楽隊は各地に募集に行っている。山口(1973) pp.40-41。

ば左、「箸の手」といえば右、茶碗手箸の手で教えた教官もなかなか骨折でした」。

ところで、明治10年の白米10キログラムは、51銭である。明治12年の鶏卵100匁(375グラム)は、10銭である。卵1個の重さ52グラムとして、1ヶ月の卵代を1日3個として計算すると、2円50銭となる⁴⁷。明治14年の巡査の初任給は、6円である⁴⁸。卵代だけで、巡査の月給の約42%にあたる。食事はいい、訓練もたいしたことはない、ところが学課が問題である。右左がわからない下士官候補生に、右左から教えなければならない状況を、高島は団長として身をもって経験することになる。また寺田寅彦も教導団出身で中学の体育教師をしている親類の話を書いている⁴⁹。教導団は明治において社会的評価をえていたということである。

1895(明治28)年4月11日の『国民新聞』に、「高島將軍の俠氣」と小見出しがあり⁵⁰、以下の記事が記載されている。「曾って西南の一剛将なりし逸見十郎太の紀念児なる某を東京に呼び、懇ろに教訓至たらざるなく、以て当年竹馬の友たる地下の亡霊に報い、薩南の健児に將軍一片の俠骨香し一死為に惜しからずと歌せたる高島中將は、さきに征清に向いし年少仕官陸軍中尉中萬徳治氏が、火村の役天晴見事なる最期を遂げしに感激して止まず、深くその死を悼み、自ら其遺族を引受け看護せしは当時の一美談なりしが、然るに、今又た聞く所によれば、將軍は過日広島大本營地に於いて俄然自殺したる別府少佐の平素の人と為りを愛慕し、深く其非命の死を哀悼し、其の遺族の不幸を憫察し、今後は將軍自ら遺族を引受け看護すると云う。左れば地下の逸見と云い、中萬中尉と云い、別府少佐と云い、將軍の俠氣を聞かば如何ばかり嬉しからん。男兒感意氣、功名又何論、將軍の為に一死惜しまずと云う武官多きとかや」。

また、同じ日に、『国民新聞』は別府少佐の件を報じている。

「近衛歩兵第三連隊第一大隊長別府少佐は此程広島に於て自殺を遂げたるが今氏の為人を聞くに氏は旧岡山藩士族にして幼より文武を研究し維新の年東征の役に従い明治五年三月陸軍教導団に入学し同七年卒業少尉試補を命じられ十年の役第二旅団に属して肥薩の野に転戦し遂に腰部を傷けられたるを以て一時帰京して療治を受けしが幾ならずして平癒し新撰旅団参謀部附命じられ再び出征するに至れり凱旋後中尉に昇り勲六等に叙せらる後大尉に進み勲五等に叙せられ大阪第四師団の中隊長たり廿五年少佐に任し近衛大隊長に転ず性沈毅果敢妄りに言笑せず而して一度信ぜし処は必らず之を遂行するの概あり高島將軍常に其器を愛し将来に属望する処あり今度の凶変に接し人に語つて曰く曩には福屋中佐を喪い今又別府を失う殆んど余の手足を断れる、が如しと其信任を受くる知るべきなり氏は嘉永五年を以て生る享年四十有五嗚呼哀哉」。

逸見十郎太は1848(嘉永2)年に鹿児島城下上荒田町、三方限で生まれ、享年29歳である。戊辰

47 $6 \times 30 \times 52 \div 375 \times 10 = 249.6$ である。

48 卵の価格、白米の価格、巡査の月給は、それぞれ週刊朝日編(1987)下、p.53, p.159, p.571による。

49 寺田(1996) p.22.

50 この記事は湯本編(2000) p.361, に転載されている。

戦争に参加し、奥羽にも出撃している。1871(明治4)年に近衛陸軍大尉となり、1873(明治6)年に鹿児島に帰っている。同年5月5日午前1時20分に皇居の大火があったとき、無断外出をしていて出宮に遅れた。近衛都督は西郷隆盛で、近衛局長官は篠原国幹である。無断外出が問題となり、糾問を受けるが西郷隆盛の助けで死を免れている⁵¹。西郷が参議、近衛都督の職を辞すのが、同年10月24日である。辺見も、西郷と相前後して鹿児島に帰っている。高島とは幼少の折近所であり、戊辰戦争、奥羽にも出征し、1873(明治6)年の皇居火災の時、高島は侍従番長である。短期間に重なるところがおおい二人であり、公私ともに交友があったと考えられる。

注目したいのは別府忠純少佐である。別府は1872(明治5)年3月に教導団⁵²に入学し、1874(明治7)年に卒業している。別府が卒業した翌年2月、高島は教導団長になる。西南戦争では、別府は第2旅団に属し、高島は別働第1旅団司令官⁵³である。また、別府の1892(明治25)年までの任地は第4師団である。さらに別府は1891(明治24)年11月28日から翌年10月11日までの約10ヶ月、大阪偕行社附属小学校の第3代校長である⁵⁴。1888(明治21)年には、別府は大尉で第4師団歩兵8連隊の副官である。別府は教導団の出身者であり、第4師団の将校、および大阪偕行社附属小学校の第3代目の校長である。教導団、大阪偕行社附属小学校は高島の俠気にも影響を与えていた⁵⁵。

高島は、1895(明治28)年8月21日に台湾副総督に任命されて、このときつぎのようなことを言っている⁵⁶。「今後台湾に渡航せしむるものは、皆一人前の地位を作り、又は苦楽を凌がんと欲せず、皆共に台湾を拓き、邦家のため一事業を起さんとするような意気込の人物を希望する」。

また陸軍大臣のとき、言論の自由について高島の談話がある⁵⁷。「人智進化の今日、政論に対しては、絶対的自由を与え、行政処分の特例を廃すること、極めて緊要なるを感ぜざるを得ざりき。(略)人智の進歩、亦言論検束の必要無きを知るべし。ただそれ、軍事、外交の機密に涉るが如き、皇室の尊厳を冒瀆するが如き、宜しく特別の制裁なかるべからず」。

高島が「学校」を開設した趣旨も、台湾を日本に置きかえれば済む。「学事奨励に関する被仰出書」で述べられていれるように、学問をすることはまずは自分のためである。そうすれば、貧乏・破産することはないと非常にわかりやすい平易な説明である。高島がここで、強調したのは、個

51 近世名将言行録刊行会(1934) p.406.

52 教導団を卒業後、士官学校に転入することもできた。田中義一は、教導団出身者でのち大将になっている。秦編(2005) p.718.

53 第2旅団には教導団歩兵第1大隊が所属し、別働第1旅団には教導団工兵が所属している。内川・松島(1983) p.148.

54 天野(1958) p.455. 別府はこのとき第4師団歩兵第8連隊第1大隊長である。大阪偕行社附属小学校の初代校長守永薫は、歩兵第7旅団大阪大隊区司令官である。『職員録』明治21, 24年.

55 もともと高島は、「親分肌の人で」、「大勢の子分を抱え込んだりしていた」。樺山(1988) p.121. 明治創成期のこの時期、軍人の死を悲しいとおおらかに公言している。

56 樺山資英伝刊行会編(1942) pp.258-259.

57 『太陽』3巻, 2号, p.300.

人、自分のためにだけ事業をするのではなく、そうするのは国のため、社会のため、そして天皇のためであるということである。高島は、藩ではなく国のため、藩主ではなく天皇のためというのぼりを挙げて命をかけてきた人間である。高島が教育事業を考えたのは、自分自身だけのことでなく、社会のことをも考える、考えられる人を育てたいということであろう。そして言論は自由であると明言していることは注目に値する。

社会を担う明日の人材を育てるという崇高な事業を行うところが学校である。高島が、学校のなかで小学校を設立したのはなぜなのか。

1870(明治3)年1月、鹿児島桜島の地頭、高崎正風は垂水学校を創設し、翌4年、鹿児島藩の教育制度が改革されるとともに垂水学校は第1郷校として認可されている⁵⁸。

1871(明治4)年1月、鹿児島藩庁は藩校造志館の改革を行なっている。静岡から招聘された蓮池新十郎の「上級学校ばかり充実しても意味はない。むしろ初等教育に力をそそぐべき」⁵⁹との方針にもとづき、造志館を鹿児島本学校と改組し、鹿児島本学校の附属校として小学校が4校開校される。これが人気を呼び、民間の資金で郷校⁶⁰が多数設立される。

税所篤は、1870(明治3)年堺県知事に就任し、翌年3月に郷学校を設立している。学校の設立を法で定め、それを郷校と呼んでいる⁶¹。

1872(明治5)年5月23日、明治天皇は、西郷隆盛とともに鹿児島本学校の授業を参観し、外国人教員2人、蓮池新十郎と昼食をともにする⁶²。

また、1874(明治7)年4月、私学校が鹿児島に設立される。これは賞典学校と銃隊学校、砲隊学校の三つからなる。私学校は、西郷等が明治2年に明治維新の論功行賞でもらった賞典禄を資金にして設立したものである⁶³。大久保利通は賞典禄1800石を駒場農学校(内務省が農事修学場として設置したもので、のち東京大学農学部になる)に寄付をしている⁶⁴。

さらに1879(明治12)年8月の「教学聖旨」⁶⁵につぎの文章がある。

「仁義忠孝の心は人皆之有り。然ども其幼少の始に、其脳髓に感覺せしめて培養するに非れば、

58 南日本新聞社編(1967)中, pp.378-379.

59 同, pp.90-91.

60 郷校は4つの小学校と内容はほぼ同じだが、資金はほとんどが民間の負担で設立される。これが13校、開校している(同, p.91)。1854年、島津斉彬が一郷一校の設立を指示する。同(1967)上, p.40.

61 税所は鹿児島藩士、三方限出身である。新修大阪市史編纂委員会編(1991) p.676.

62 同, pp.83-84. 明治天皇が外国人と会食する最初である。本学校に同行したかどうかはわからないが、この巡幸には高島も随行している。

63 同, pp.132-133. 「三方限名士略伝」p.19, p.21. 西郷隆盛の賞典禄は2000石、桐野利秋200石、大山綱良800石である。大久保利通も賞典禄1800石を出しているが、明治9年3月、内務省のために必要として、これを引き上げている。高島の賞典禄は8石である。1石がどのくらいかを計算するとつぎのようになる。1食に白米1合、1日3回食べると仮定すると1日3合、1年では1石である。残りは余るということになる。明治元年の米の価格は、10kg当たり55銭である。1石を150kgとすれば、1石は8円25銭になる(米の価格は週刊朝日編(1987)下, p.159).

64 毛利(1969) p.164. 山住(1987) p.16. 駒場農学校は大久保の建白で設立されたと牧野伸顕は述べている。毛利(1969) p.33. 高島は明治14年12月、鹿児島県学校費として24163円を寄付している。神田中学校友会(1901) p.425.

65 山住(1990) pp.78-79.

他の物事已に耳に入り先入主となる時は、後奈何とも為す可からず」。

鉄は熱いうちに打てということである。これよりまえ1872(明治5)年5月、大阪の造幣寮内に局員とその子弟の英学学習のために日進学社⁶⁶が開設され、明治16年には幼稚園、小学校も設立している。東京では、明治10年10月17日、華族の学校、学習院が開業式を行っている。大阪の私立小学校をみると、明治15年、信愛女子小学校尋常科・同高等科が設立され、明治21年には大阪借行社附属小学校、梅花女学校附属尋常小学校と淇澳尋常小学校、明治26年にはプール女学校付属尋常小学校、明治32年には明星尋常高等小学校高等科が設立されている⁶⁷。

さきにふれたように兵学寮は大阪に設置され、のち東京に移転し、陸軍士官学校、陸軍幼年学校、陸軍教導団となる。高島は陸軍教導団長を経験する。軍隊の教育機関が存在した場所大阪の地に高島が士官学校、幼年学校に接続する小学校設立を考えたとしてもおかしくはない。

この時期必要とされたのは、指導者である。この指導者は、徴兵制で集めた右も左もわからない兵隊を指揮できるだけの能力が必要とされる。そしてこのことは軍隊だけにかぎられたことではない。これら指導者に必要なものは、専門知識・技術だけではない。必要なのは教養である。西郷が高島を侍従として推挙したのも、高島の教養人としての資質を是としたからだとおもわれる。人材を育成し指導者養成の裾野を広げるためには、なによりも小学校が必要である。

西郷、大久保をはじめ多くのひとが学校に自己資金を投入している。しかも鹿児島藩庁においても、中央政府においても、大阪においても教育改革が行われ、小学校の重要性をうたい、それを実行している。高島は大いに影響を受けたとおもわれる。

3

1876(明治9)年10月、陸軍大佐高島鞆之助は萩の乱鎮圧に派遣される。1877(明治10)年2月15日、西南戦争が始まる。同年2月23日、高島は征討総督本営師団幕僚参謀となり、のち長崎警備隊長⁶⁸になる。同年3月8日、別働第2旅団司令長官に任命され、同年3月28日、少将になるとともに、別働第1旅団司令長官として従軍し、10月15日に凱旋している。1879(明治12)年2月19日から明治13年3月26日まで、フランス・ドイツに留学している。この間の高島に関する挿話である⁶⁹。

「外国語は頓と知らなかった、(略)。又皇后陛下に立列拝謁あり、陛下は高島の前に御立止り

66 新修大阪市史編纂委員会編(1991) p.708. 部外者の入学も認めている。

67 同, p.732.

68 『帝国陸軍編制総覧』p.151.

69 樺山資英伝刊行会(1942) p.267. この前の文では、宮中の晩餐会で、高島がモルトケ將軍と対座し、モルトケから話しかけられるのを避けるため、前に置かれた花瓶を利用してモルトケと視線が合わないよう努力した様子がユーモラスに紹介されている。

になり、何事か御挨拶あり、自分は目礼低頭するばかりであったが、二三度御言葉を繰返されたる様覚ゆ、後にきけば最初陛下は独逸語で仰せられ、次いで仏語、英語で仰せられたが、三国語共に高島子爵に通ずることが出来なかつたが、日本語で話し能わなかつた事を遺憾とするとの挨拶であつた」。

薩摩藩は攘夷論者がおおく、それが生麦事件をひきおこす。1863年の薩英戦争で、外国の、イギリスの力を知り、開国論に180度展開する。このとき高島が攘夷論者であったかどうかはわからないが、洋才の必要性をあらためて認めたことと推察できる。年をとってからの留学で、言葉が通じない不便を経験し、子供のときに学ぶことの大切さを考えたこととおもわれる。帰国後、1880(明治13)年5月17日、フランス第3共和国政府より、レジオン・ドヌール勲章コマンドールを授章している⁷⁰。そして1880(明治13)年4月29日に陸軍教導団長を辞めて、熊本鎮台司令長官になり、翌年2月9日、大阪鎮台司令長官になる。1888(明治21)年、大阪偕行社附属小学校を開設し、ついで第4師団長となる。第4師団長についてつぎのような文章がある。

「由来第4師団は近畿の弱兵なるを以て之を統率するの將軍其人を得ざれば、其成績の挙がるを期すべからず、故に歴代之に師団長たるものは概ね皆陸軍部内に重きをなすの威望と手腕とを兼備する(略)。

即ち其初代の師団長たる高島鞆之助は薩派の軍政治家として一時部内の権勢を握り、(略)。

斯くの如く過去に於ける第四師団長を列挙し来る時は、(略)皆ある意味に於ける部内第一流の人物に非ざるは莫し」⁷¹。

当時、偕行社⁷²だけでなく、月曜会⁷³、騎兵学会、砲工共同会、經理学会、等の各種の団体があつた。大阪博行社は1878(明治11)年2月に設立されている。この中で月曜会は、山縣を中心とする陸軍当局と対立するようになる。そこで各種の団体を偕行社にまとめる交渉をするようになるのが1888(明治21)年2月ごろである⁷⁴。同年3月、これに月曜会は反対した⁷⁵ため、第4師団では師団長高島鞆之助が内示して師団の将校535名を脱会させるとともに、翌22年2月に、近衛都督小松宮彰仁、第2師団長佐久間左馬太、第3師団長黒川通軌、第4師団長高島鞆之助、第5

70 『枢密院高等官履歴』p.145。レジオン・ドヌール勲章は、1802年にナポレオンが創設したもので5階級がある。

71 滄溟(1913) p.153。また「第4師団長大迫尚道は深沈寡黙思にして慮周密なるのみならず、其器局亦大なるを以て之を帷幄の材として見るも、実践家として見るも、或は又軍政治家として見るも、確かに一頭地を抜くの偉材たり」とある。近世名将言行録刊行会(1934) p.484。では「鞆之助の大阪鎮台司令長官たる時、人あり曰く、大阪鎮台は弱い事で有名である。斯の如き兵を師いて何を為さんとせらるゝかと、鞆之助曰く、楠公は摂河泉の兵を以て、関東百万の大敵を悩ました。大阪鎮台と雖も將を得れば元弘の昔の功用をなすに違いない」となっている。

72 偕行社は、明治10年1月、東京において小松宮彰仁、曾我祐準等により設立される。

73 月曜会は明治14年に結成され、明治20年の会員数は1678人である。会長は堀江芳介大佐、顧問は三浦梧楼中将、鳥尾小弥太中将、谷干城中将、曾我祐準中将、明治18年から『月曜会記事』を発行する(秦編(2005) p.694)。かれらは専守防衛派とみられ、陸軍首脳部と対立する(由井・藤原・吉田(1989) pp.460-461)。月曜会は、曾我が陸軍士官学校長のときの1期生、2期生を中心にして結成される(曾我(1988)所収、山田朗「解説」p.5)。偕行社が『偕行社記事』を発行するのは、明治21年からである。

74 大阪博行社は、明治15年1月31日に偕行社に合併し、大阪偕行社と改称する。

75 このため、桂太郎、児玉源太郎、寺内正毅等は月曜会を脱会する。

師団長野津道貫、第6師団長山地元治⁷⁶の連名で、月曜会を合併し偕行社ひとつにするように陸軍大臣に建議する。これを受けて同年2月20日、月曜会に対して、大山巖陸軍大臣は解散命令を出す⁷⁷。結果、反山縣勢力は陸軍を追われることになる。これ以降、偕行社は全陸軍将校を含む、陸軍大臣が統括する組織となる。高島は偕行社に統一した功労者といえる。このようにみると、時期から考えて、高島は大阪偕行社附属小学校開設によって、第4師団・大阪偕行社の人心をひとつにまとめることを考えていたかもしれない。

第4師団長のころの高島は、「東西に往来するものは京都の重鎮として之を目し、西郷の後継者は此人なり」と言い声望一世に高⁷⁸い状態だったようである。その結果、高島は新島襄にも頼られることになる。新島は1875(明治8)年、京都に同志社英学校を設立し、1888(明治21)年、同志社大学設立の旨意を公表する。そして、第4師団長であった高島に、新島は同志社大学設立に協力依頼をしている⁷⁹。

1889(明治22)年2月13日、徳富猪一郎宛の手紙につぎの一文がある。

「(同志社大学設立に)高島中将、(略)は賛成なり。」

また、1889(明治22)年10月26日、児島惟謙宛手紙にも、高島の名前が出てくる。

「高島中将(略)にご面会の節は、宜しくご鳳声下されたく仰ぎ奉り候。」

教育とのつながりは高島本人にみられるだけでなく、高島の周囲にも及んでいる。今井兼利少将は大阪偕行社附属小学校の初代設置者⁸⁰である。今井もまた鹿兒島出身であり、1879(明治12)年10月14日から1882(明治15)年3月1日の間、陸軍大佐で工兵局長を務め、1883(明治16)年2月1日に工兵会議議長⁸¹となり、1885(明治18)年5月21日、陸軍戸山学校校長⁸²となっている。今井も軍楽隊と関係の深い戸山学校の校長を経験している。そしてこの日は、高島頼之助が大阪鎮台司令長官になった日でもある。また1888(明治21)年3月24日に教導団軍楽基本隊は陸軍戸山学

76 山地は、明治15年2月6日から18年5月21日の間、大阪鎮台司令長官であり、黒川は明治24年6月1日から26年11月10日の間、2代目の第4師団師団長である。井上(1922) p.272。

77 松下(1956)下, pp.231-237。

78 三宅(1939) p.263。平沼騏一郎も、高島が第4師団長のとき「関西方面の名士は、凡て將軍の門を出入りするという豪勢であった」と述べている。樺山資英伝刊行会編(1942) p.677。高島が大阪鎮台司令長官のとき、明治18年7月、和歌山城内の居館を移築、司令部事務室とし、これを御殿とよぶ。2度の大演習の折、明治天皇の行在所、大正天皇の行在所となる。井上(1922) pp.273-274。

79 同志社編(2005) p.273, p.296。児島惟謙は明治19年11月4日関西法律学校(関西大学の前身)の開設を援助している。新修大阪市史編集委員会編(1991) p.728。高島は、明治23年5月4日、大阪控訴院長児島惟謙とともに明治天皇に拝謁している。宮内庁編(1969)第七, p.544。

80 今井初代設置者から第3代大久保春野、第4代設置者鮫島重雄まで師団長ではない。第4師団長が学校設置者になるのは第5代設置者の小川又次第4師団長からである。天野(1968) p.450。『職員録』明治21年、明治25年、明治29年。

81 福川(1999) p.64。今井は「日本工兵の産みの親」とある。松下(1942) p.248。工兵会議は1883(明治16)年1月31日に置かれるので初代議長である。由井・藤原・吉田(1989) p.461。この時代日本国内のインフラの不整備、清国との戦争等を想定して工兵の重要性が指摘されている。

82 陸軍戸山学校は、1873(明治6)年、旧尾張藩の下屋敷跡戸山に、兵学寮の戸山出張所として開設され、翌年陸軍戸山学校と改称する。1888年、馬場先門外にいた教導団軍楽基本隊が戸山学校に所属するようになり、1891年に戸山学校内に移転している。1912年から、戸山学校は体操科と軍楽生徒隊とで構成される。原・安岡(1997) pp.176-177、『帝国陸軍編制総覧』p.141、松下(1956)上, p.358、山口(1973) p.80。

校に所属する。1890(明治23)年9月16日、歩兵第7旅団長陸軍少将今井兼利はコレラのため大阪でなくなっている。今井は西南戦争に従軍し、第2旅団参謀として各地で転戦している⁸³。この第2旅団は、さきにふれた別府大阪偕行社附属小学校第3代校長が所属した旅団でもある。

高島頼之助は、藩から国、藩主から天皇に軸を移す時代に生まれ、育つ。時代はそのための指針を求める。かれも指針を求め、『日本外史』を愛読していた。それを根幹として、侍従として仕えることで知識が涵養され、枝葉をおおいに伸ばし、その結果が大阪偕行社附属小学校設立という大事業に結びついたものと思われる。また留学経験、教導団長、月曜会事件を通じて、教育がいかに人に影響を与えるかを経験した結果も影響していると考えられる。国という意識も定かでないこの時期、何よりもはやく国を確立しなければならない。国づくり、人材づくりで高島の周りは、学校設立ラッシュである。人を導くのは時代であり、環境である。高島はときと場所を選んで生まれ、時代が高島を育て、高島は時代から学び、時代を切り開いたひとりとなる。そしてよき協力者をえて、次代のために大阪偕行社附属小学校を残した。

参考文献

- 朝倉治彦(1969)『明治官制辞典』東京堂出版。
天野利武編(1968)『八十年志』学校法人追手門学院。
井上正雄(1922)『大阪府全志』卷之二、大阪府全志発行所。
内川芳美・松島栄一監修(1983)『明治ニュース事典』第1巻、毎日コミュニケーションズ。
遠藤汪吉編(1978)『九十年志』学校法人追手門学院。
大阪市東区史刊行委員会編(1981)『続東区史』第3巻。
大塚弥之助(1940)「故徳永重康博士」『科学』10巻、4号、岩波書店、pp.30-32。
解説教育六法編修委員会編(2005)『解説教育六法2005』平成17版、三省堂。
鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編(1994)『鹿児島県姓氏家系大辞典』角川日本姓氏歴史人物大辞典46、角川書店。
霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)『平成新修旧華族家系大成』上下、吉川弘文館。
樺山愛輔(1988)『父樺山資紀』大空社。
樺山資英伝刊行会(1942)『樺山資英伝』樺山資英伝刊行会。
神田中学校校友会(1901)『皇室之藩屏』博報堂。
『官報』第2018号、明治23年、3月26日、pp.278-279。

83 宮内庁編(1969)第七、pp.629-630。

- 近世名将言行録刊行会編 (1934) 『近世名将言行録』 1, 吉川弘文館.
- 宮内庁編 (1969) 『明治天皇紀』 第2, 第3, 第7, 吉川弘文館.
- 『国民新聞』 明治28年4月11日.
- 佐々木克監修 (2004) 『大久保利通』 講談社.
- 佐藤誠実 (1903) 『日本教育史』 1, 2, 仲新・酒井豊校訂 (1973), 平凡社.
- 『三方限名士略傳』 三方限名士顕彰会, 1935.
- 篠田鈺造 (1996) 『明治百話』 上下, 岩波書店.
- スマイルズ, サミュエル (1858) 『西国立志編』 中村正直訳 (1981), 講談社.
- 週刊朝日編 (1987) 『値段の明治大正昭和風俗史』 上下, 朝日新聞社.
- 『職員録』 印刷局, 明治21年, 明治25年, 明治28年, 明治29年.
- 新修大阪市史編纂委員会編 (1991) 『新修大阪市史』 第5巻, 大阪市.
- 『樞密院高等官履歴』 第3巻, 大正の一, 東京大学出版会, 1996.
- 『先賢偉人伝』 追手門学院小学校, 1988.
- 曾我祐準 (1988) 『曾我祐準翁自叙伝』 伝記叢書42, 大空社.
- 滄溟漁史 (1913) 「各師団及師団長 (下)」 『太陽』 19巻16号, pp.145-153.
- 「高島陸相を官邸に訪ふ」 『太陽』 3巻2号, 1897, pp.299-301.
- 高島鞆之助謹話 (1912), 「神武以来の英主」 『太陽』 臨時増刊, 18巻13号, pp.32-37.
- 多木浩二 (1988) 『天皇の肖像』 岩波書店.
- 田辺尚雄 (1965) 『明治音楽物語』 青蛙房.
- 寺田寅彦 (1996) 『柿の種』 岩波書店.
- 同志社編 (2005) 『新島襄書簡集』 岩波書店.
- 頭山満 (1927) 「頭山立雲斎の言葉」 『日本及日本人』 9月15日, pp.38-39.
- 『帝国陸軍編制総覧』 芙蓉書房出版, 1987.
- 名村精一 (1997) 『追手門学院の源流』 追手門学院小学校.
- 日本近代史料研究会編 (1971) 『日本陸海軍の制度・機構・人事』 東京大学出版会.
- 『日本人名大事典』 復刻版, 平凡社, 1979.
- 秦郁彦編 (2005) 『日本陸海軍総合事典』 [第2版], 東京大学出版会.
- 原剛, 安岡昭男 (1997) 『日本陸海軍事典』 新人物往来社.
- 百年志編纂委員会編 (1988) 『百年志 追手門学院』 学校法人追手門学院.
- 福川秀樹 (1999) 『日本陸海軍人名辞典』 芙蓉書房出版.
- 松下芳男 (1956) 『明治軍制史論』 上下, 有斐閣.
- 松下芳男解題 (1942) 『陸軍省沿革史』 明治文化叢書12, 日本評論社.
- 三宅雪嶺 (1939) 「半百年生死録」 『人物論』 千倉書房, pp.214-271.

- 宮本直和（2000）『大阪偕行社附属小学校物語』東洋出版。
- 毛利敏彦（1969）『大久保利通』中央公論社。
- 森銑三（1965）『明治人物逸話辞典』上下，東京堂出版。
- 森銑三（2001）『新編明治人物夜話』（小出昌洋編）岩波書店。
- 南日本新聞社編（1967）『鹿児島百年』上，中，下，謙光社。
- 山口常光編著（1973）『陸軍軍楽隊史』三青社。
- 山住正己（1987）『日本教育小史』岩波書店。
- 山住正己（1990）『教育の体系』日本近代思想体系6，岩波書店。
- 由井正臣・藤原彰・吉田裕（1989）『軍隊 兵士』日本近代思想体系4，岩波書店。
- 雄山閣出版『類聚伝記大日本史』刊行会（1981）『類聚伝記大日本史』14，陸軍編，雄山閣。
- 湯本豪一編（2000）『図説明治人物事典 政治家・軍人・言論人』日外アソシエーツ株式会社。
- 頼山陽（1829）『日本外史』頼成一・頼惟勤訳（1976），岩波書店。
- 渡邊幾治郎（1936）『明治天皇と輔弼の人々』千倉書房。

（付記） 引用文について，仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所，漢字を当用漢字に改めた箇所がある。また引用文にある振り仮名，傍点の一部を除き省いている。